

大阪商業大学学術情報リポジトリ

本多利明とオランダ語文献

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2016-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森岡, 邦泰, MORIOKA, Kuniyasu メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/77

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



本多利明とオランダ語文献

森 岡 邦 泰

1. はじめに
2. 問題の所在
3. 洋書
4. コーラントトルコ
5. 終わりに

1. はじめに

江戸時代後期の経世家・和算家の本多利明（1743–1821）の経済思想は、オランダとロシアを経済発展の二つのモデルとして理想化し、日本がそれに至らないとして、様々な政策提言をするものであった¹⁾。それが四大急務である。たとえば、ロシアについては、「モスコビヤにては、我が骨肉を削て土人へ副んとする制度なれば、蝦夷之諸島之土人等、彼之吏を神仏之如く尊信恭敬するは至極其善なり」（『大系』「経世秘策補遺」46頁）などと述べた。オランダとロシアの理解が、その経済思想の根拠となっているので、どのようにしてそのような理解に至ったかを明らかにすることは重要であると思われるが、これまでの研究では、それが解明されることはなかった。

2. 問題の所在

秋月俊幸は「モスコビヤにては我骨身を削て土人に副んとする制度なれば、蝦夷諸島の土人等彼らを神仏の如く尊信恭敬するは至極其善なり」と本多利明の『経世秘策補遺』を引用して、利明がロシアを理想視していたことは、ロシアの恐るべきことを警告したオランダ人の説を逆に誤解したもので、すでに吉雄幸作の言説や工藤平助の『赤蝦夷風説考』にも見られるものであること、そしてロシアの脅威を力説した林子平ですら同様な見解を述べており、それは後に、函館奉行の羽太正養の『休明光記』や『辺策私弁』にも影響を与えていると、いっている（秋月俊幸 [2014] 124頁）。こうしたロシアの理想視は、利明一人に限ら

1) 森岡邦泰 [2015] 39、40頁。

ず、当時のこの方面の識者に広く共有されていたことが指摘されている。しかしそれが、ロシアの恐るべきことを警告したオランダ人の説を逆に誤解とされており、もしそれが誤解だとすれば、どうしてこうした誤解が生じたかは、詳らかにされていない。

小沢栄一は、利明が当時の日本で一般にはあまり注目されていなかったイギリスに注目していることを取り上げ、イギリスの富剛と強大ぶりを指摘しているテキストを引用したあと、「何か最新のヨーロッパの地理書の知識を媒介にしたにちがいない。尤も、その地理書が何であったかは明らかでない。このころ初期蘭学者たちに珍重されたヨーロッパの地理書としては、希観書ではあるがヒュブネル(非蒲湜児)の『ゼオガラヒ』と、同じく『コーラントトルコ』があったが、……これらの書を『西域物語』編術までに利明が研究したかどうかもたしかでない。」(小沢栄一[1966]64頁)といい、そして「『西域物語』の内容からみても、たぶん利明は見ていなかったであろう」と推測している。しかし小沢も認めているように、山村才助を通じて『西域物語』成立の頃に、少なくとも『コーラントトルコ』は、書名をあげていなかったとしても、知っていた可能性は排除できない。その後も考察を続けているが、結局、何か最新の地理書とは何であったのか、不明のままである。

片桐一男は、林子平のロシア認識の根拠について次のように述べている(片桐一男[1978]3-6頁)。林子平に『三国通覧図説』『海国兵談』という警世の書を著述させ、資金難にもかかわらず、自費出版させたものは、とりわけ、ロシアの南下による蝦夷地の形勢に対する脅威であり、子平自身の述懐によると、安永の末年に長崎においてオランダ商館長フェイトから啓発されるところがあったからだ。フェイトが北辺の形勢を子平に教示した根拠は1771年のベニョフスキーのオランダ商館長宛の書簡であったが(もっとも1771年の商館長はアルメナウルト)、この書簡が幕府に報告され、同年10月23日に旧商館長アルメナウルトと新商館長フェイトが連署して、長崎奉行に提出した本件に関する届書によると、本事件発生当時まで両人ともロシア人の状況など皆目知るところがなかったらしい。以上の状況から、片桐一男は、ベニョフスキー情報に基づいて日本人に 子平にも 北辺の情勢について入説したものと思われる、と述べている。しかし、知識不足から不十分な点もあり、また通詞にもはなはだ曖昧・不正確な点があったため、どの程度正確に伝わったのか疑問に残るといい、子平や工藤平助が附会の説をなしていることから、一層その感を強くする、子平が頼った通詞が誰であったかも知りたい一事である、と付言している。つまりオランダ人はベニョフスキー情報のみに基づいて子平に語り、それ以外のロシア情報については、出所が結局はっきりとはわからないということである。

子平自身は「海国兵談」第十五巻で、オランダ商館長フェイトと対談したと述べており、これは安永4年(1775)のことと推測されている(林子平[1978b]7頁)。子平は再び安永6年(1777)から安永7年にかけて長崎に滞在し、さらに天明2年(1782)にも長崎に遊学し、子平自身が「海国兵談」の出版資金を得るため描いた「和蘭人宴会図」にある空席一つが、招かれた子平のためと思われる『全集』の解説は推測し、蘭人家庭の食卓に列しているようである、と述べているが(林子平[1978b]8頁)、もしそうなら、通詞を介してであろうが、子平が興味をもつ世界情勢について、オランダ人から直接聞く機会がかなりあったであろう。しかし上述のように、また後でも述べるが、交易に来ていたオランダ人がロシア情勢に詳しくとは考えられない。

子平は『三國通覽圖説』で、「日本寛文ノ頃ヨーロッパ歐羅巴洲、ムスコウピヤ莫斯科未亞ノ女帝、大豪傑ニシテ五世界ニ帝ヲラント志ヲ振イ起シ、制ヲ定メ令ヲ下シテ曰、吾ヨリ後、子々孫々、我ガ制ヲ不改、土地ヲ廣クシ功ヲ大ニスルヲ以テ、帝業トセヨトナリ、ソレヨリ日々月々二人オラ擧用テ、次第ニ韃靼ノ北邊ヲ略シテ、終ニ日本元文ノ頃迄ニ、東ノ限リカムシツカトカ加模西葛杜加ノ岬マデ（則カムサスカナリ）²、日本道三千餘里ヲムスコウピヤ莫斯科未亞ノ領國ト爲テ、彼ノ國ヨリ代官ヲ置テ國事ヲ勤メシムル」（林子平〔1978a〕73頁）と述べている。ここできわめて興味深い点は、利明のロシアモデルおよびエカテリーナについての叙述とまったく軌を一にしていることである。両者はまったく同じロシア認識に立っているのである。おそらくこういう認識が当時の識者に共有されていたのだろう。この文言で注目すべきは、エカテリーナの偉業として、韃靼を攻略し、さらにカムチャッカまで至ったとしていることである。しかもそれを元号で元文の頃としている。エカテリーナは在位が1762～96年だが、元文は1736年4月28日から1741年2月27日までで、まったく合わないのである。つまりエカテリーナ以前から行われてきたシベリア開発がエカテリーナの業績と混同されているのである。そうだとすると、利明も同様に混同していたと思われる。そう考えると、子平や利明のエカテリーナ評価の謎がようやく解ける。

これまで利明は『大系』の注でも、エカテリーナを理想化しているといわれてきた。そしてそれは子平も同様だといわれてきた。しかし、エカテリーナの即位は、1762年であって、しかも最初の頃はまだ統治が安定していなかったとロシア史の本は語っている。当時、西洋に関心を持つ者の間で珍重されていた地理書、歴史書は、上述のように『ゼオガラヒー』、『コーラントルコ』があり、また、プレホスト Prévost の『諸国風土記』、ゴットフリートの『西洋全史』などもあるが、『ゼオガラヒー』の一番新しい6冊本でも1769年刊行（山村才助が見た4冊本はさらに古く1745刊行）で、エカテリーナ即位の7年後に過ぎない。実際に原稿が書かれたのは、それより前だから、エカテリーナの詳しい業績を書けるはずがない。実際、6冊本『ゼオガラヒー』によったと思われる工藤平助の『赤蝦夷風説考』も、エカテリーナの即位したという事実のみを書いているだけだし、レイツ（J. F. Reitz）他『新旧ロシア帝国誌』（1744年）を翻訳してもっと詳しいロシア史を記した前野良沢にしても、1744年よりあとの歴史については、ごく簡単にエカテリーナの即位の事実を述べているだけである（前野良沢〔2010〕114頁）。

他の本はもっと古く、『コーラントルコ』が1732～48年刊、『諸国風土記』が1747年刊、ゴットフリートに至っては、1660年刊である。あとで見ると、自然科学を記した百科事典ならもう少し刊行が新しいものもあるが、地理書、歴史書となると、普通、書名が上がる本は、このようにエカテリーナの業績を述べ得ないのである。これらの本より新しい最新の西洋情報をもたらしたものとしては、『和蘭風説書』があるが、拙稿で検討したように（森岡邦泰〔2015〕）そこには、子平や利明が考えるようなエカテリーナの業績は何一つ述べられていない。エカテリーナに関して『風説書』が教えることと、利明の叙述が一致するのは、死去の情報だけである。従って利明は、おそらく、それ以前の事績を、エカテリーナのものと同様に混同して、理想化していた可能性が高い。

2) 割り注を括弧で示す。なお、本文中の返り点は省略した。

最新のロシア事情を知る方法として、直接オランダ人に聞くという手もある。実際、商館長の江戸参府の際は、多くの蘭学者がオランダ人を宿へ訪ねてきたといわれているし、子平のように直接長崎に行って聞く者もいた。通詞ならなおさら頻りにオランダ人に聞けたはずである。しかし、漂流民の光太夫から聞き取りして記した、桂川甫周の『北槎聞略』には、付録として「魯西亞略記」という簡単なロシア史とロシア地理の記述がついているのだが、その冒頭で甫週が次のように述べている。今年申寅(1794年)内旨を受けてオランダのカピタンのゲイスベルドヘンマイ(Gijsbert Hemmij、ヘイスベルト・ヘンメイのことと思われる)にロシアの国事を問うた。しかしヘンマイがいうには、自分はロシアに行ったことはないし、随行の人員の中にも行ったことがある者はない。しかし伝聞したところを抄録した小冊子があるから、概略を知るには足りるだろうと、*「コルトベシケレーヒンギハンリュスラント」*という書物をくれた。そこでそれを翻訳した、と(桂川甫周[1989]347頁)。

このヘンメイの回答が、オランダ人の平均的なロシア認識だったであろうと思われる。そもそも彼らは、商売をしに日本へ派遣されたいわば駐在員であって、ロシアの政治や政策を研究しているわけではない。特に遠い外国の情報を知ることが容易ではなかった当時、ロシアの国情を、オランダ商館員が、そもそも興味もないのに詳しく知っているとは思えない。商館長の中には、たまたまロシアに詳しい者もいた可能性は否定できないが、地理書が伝える情報の詳しさには及ばなかったであろうと思われる。

なお、ここでヘンメイが桂川甫周に与えた本は、きわめて簡単なロシア皇帝の略記と地理の紹介らしい。そこにはたとえば、モスクワに大鐘があって、重さ30万ポンド(ポンドは96匁で、30万ポンドは28800貫目に当たる)世界無比の洪鐘で、外国まで知られていると書いてあるが(桂川甫周(1965)351-352頁)これは、「経世秘策」に「モスコヒヤの大鐘」(『大系』「経世秘策」31頁)という記述と対応している。

このヘイスベルト・ヘンメイについては、「西域物語」にも言及がある。ヘンメイは航海について、日本の航海は片目乗、支那は盲乗と、いったと(『大系』「西域物語」114頁)。さらに寛政10(1798)年(「西域物語」成立の年)に物故したといっている。

ロシアに関しては、国土開発だけでなく、「属島開業」の戦略もまた、理想化され、称揚されてきた。まず1783年、老中・田沼意次に献上した「赤蝦夷風説考」の中で、工藤平助は、ロシアについて、「シベリヤの万民、皆その徳をしたひて尽く伏従するし置となり。ヲロシアの国をひろめるに、皆この類なり。兵威を以て、暴虐に切取、又は無名の兵を出さぬとかや」(工藤平助[1978]48頁)と述べている。これは利明の「属島開業」の撫育策と同じ認識である。利明は、文明化作用によって、未開原住民を教化することにより、日本の領土を増やすことができると説き、それはヨーロッパのやり方、特にロシアのエカテリーナのやり方で、武力で制圧する支那とは大いに違う点だと、『西域物語』の結論で述べていた。

この認識は受け継がれて、羽太正養は、次のように述べている。蝦夷地は四方が海に囲まれ、広大な島だから、堅城砦を置くこともできない。だから、「夷人どもを厚く撫育し、ことごとく國家の仁政にのべふし、衆人一致に心を決し、外國よりいかになつくとともに、敢てかたむかざるやうに教へなすより、施すべき術もなし、もとよりヲロシア國は、攻戦を好まず、人をなづくるをのみ業とすれば、この術よく整ふときは、外寇蠶食の道を斷切る道理にして、即ち衆人をもつて堅城砦となすの法也」と(羽太正養[1978](37-38頁))。

この認識の出所も謎だが、それも今後の研究課題の一つである。

3. 洋書

本多利明はオランダやロシアの国情をどのように知ったのであろうか。この時代の学者が利用する地理書には、明・清代の耶蘇会士の世界地理書があるが、いずれも成立年代が古く、すでに洋書が利用されていた18世紀後半において、西洋事情を知る上で、それほど意味があったとは思われない。実際、北方問題が焦眉の課題となった寛政以降、幕府が資料として求めたのは、蘭書の翻訳であった³⁾。そこで、洋書を検討するのが順当だろう。

利明が著書あるいは書簡であげた洋書は次のものだろう。

(1) ボイスの『学芸全書』

利明は「ボイス」と表記（『大系』「西域物語」120頁）。

Egbert Buys, Nieuwe en volkomen woordenboek van konsten en Weetenschappen : bevattende alle takken der nutige kennis, Amsterdam, 1769-78, 10dln.

(2) ショメールの『家居纂要』

利明は「シユメール」と表記（『大系』「西域物語」120頁）。後に『厚生新編』として訳されたもの。原書名は「致富と健康との方法を集めた家事字典」。

Noël Chomel, Huishoudelyk woordenboek vervattende vele middelen om zyn goed te vermeerderen, en zyne ge zondheid te behouden. In't Nederduitsch vertaald, in orde geschikt, en vermeerderd met muttige artikelen, door de Heeren J. L. Schuer, A. H. Westerhof enz. Leyden, 1743 2dln. 2e druk geheel verbeterd, en meer als de helfte vermeerderd door J. A. de Chalmot en verscheidene anderen. Leyden, 1768-77, 7dln.

(3) コンストカピネット

利明は「コンストカピネット」と表記（『大系』「西域物語」120頁）。原書名は「医学・化学・交感・魔術・経済学・数学、そのほかにわたる七〇〇以上の事項を含む自然の秘密の事典」。

J. C. Ludeman, Konst-kabinet van verborgendheden der natuur, vervattende een aantal van over de seven honderd geheime konststukken als medicynsche, chemische, sympathetische, magische, oeconomische, mathematische, en andere onderwerpen meer. 4 stukken (1 bd.), 2e druk, Amsterdam, 1770-88.

3) たとえば、保守的な松平定信が林子平を罰しながらも、蘭書の翻訳を求めて、西洋の研究に熱心だったのは、新村出の「天明時代の海外智識」に詳しい（[1925]『續南蠻廣記』46-50頁）。前野良沢のロシア関係の「東砂葛記」「東察加誌」「魯西亜本記」などの翻訳も、元々自発的に訳していたものを、幕府の命令を受けて、推敲して提出したという推測がある。

(4) マーリンの辞書

P. Marin, Dictionnaire complet François et Hollandois, 2e druk, Dordrecht, 1728. Groot Nederduitsch en Fransch woordenboek, 2e druk, 1730.

これは、その名の通り、仏蘭－蘭仏辞典である。

(5) シカツトカアメル

航海書(『大系』「経世秘策」45頁、『大系』「西域物語」114頁)。利明が「ゼエハルト」「ゼイハルト」(「西域物語」『大系』113頁、156頁ほか)などと呼んでいるものは、この第1巻。これは岩崎克己によれば、下記の本の異版だという(岩崎克己[1941c]15頁)。

Klaas de Vries, Schatkamer ofte konst der stuurlieden... de tafelen van sinus, tangens en secans en de logarithmus sinus, Amsterdam, Gerald Hulst van Keulen, 1781, 8°。

「渡海新法」には「ゼエハルトといふを手に入りてより日夜に熟読」したとある(『本多利明集』283頁)。しかし内容を理解しがたく、辛苦をつむこと20年にしてようやく大意を得たという(『本多利明集』283-284頁)。

(6) ヒストリイ

ゴットフリートの歴史書(『大系』「西域物語」99頁)、『大系』の注で、小宮山楓軒宛ての書簡(寛政11(1799)年、正月二十一日付け)に「西洋諸君政務書」とあるもの。日本最初の西洋史研究家山村才助が「西洋全史」「西洋史書」などと呼んだ、J・ゴットフリート「世界の始めから一六〇〇年までに起こった記念すべき事件を記した紀年歴史書」(Joh. Lud. Gottfried, Gotfridi historische chronyck. Amsterdam, 1660)と推定される。この本は、山村才助の基本図書の一つとされる。

(7) ケンペルの「アモニタチュン」(廻国奇観)

利明は商館長フェイトの書としているが、実はケンペルの『廻国奇観』⁴⁾(『大系』「西域物語」116頁)。

Amoenitatum exoticarum politico-physico-mediciarum fasciculi V : quibus continentur variae relationes, observationes & descriptiones rerum Persicarum & Ulterioris Asiae, multa attentione, in peregrinationibus per universum Orientem, collectae / ab auctore Engelberto Kaempfero, Lingoviae : Typis & Impensis Henrici Wilhelmi Meyeri, Aulae Lipsiacae Typographi, 1712.

原文を見ると、466頁から日本のことが載っている。利明が「西域物語」(『大系』116頁)で言及しているのは、実際はケンペルの「日本誌」のこのことである。

(8) ゼオガラヒー

ドイツ人 Johann Hübner の地理書。これには数々の版があるが⁵⁾、本多利明の研究の観

4) 同志社大学貴重図書デジタルアーカイブで見ることができる。

<http://library.doshisha.ac.jp/ir/digital/archive/amoenitatum/210/imgidx210.html> (平成27年9月14日確認)

点から重要なのは、同書のオランダ語訳で、二つある。すなわち岩崎克己が四冊本と呼んだ次のもの、

Volkomen Geographie, of Beschryving des geheelen Aardryks : behelzende al het Merkwaaardige dat tot die Wetenschap behoort. voorheen ontworpen door den beroemden Joan Hubner, en nu naar de laatste meer dan een derde varmeerderde en verbeterde uitgave des Schryvers, vertaald... door W. A. Bachiene, Amsterdam, Jac. Haffmen Piteter Meyer 1756, 3 dln. (in 4 bdn.). 8° .

及び、ヒュブナー地理書の最終決定版の六冊本と呼んだ次のもの（原書のドイツ語版は1761年から66年にかけて出版された）

Algemeen Geographie. Vermeerderd en met Aanteekeningen verrykt door W. A. Bachiene, en met eene algemeene Inleiding tot de Aardryksbeschryving voorzien door W. S. Cramerus. Amsterdam, P. Meyer 1769. 5 dln. (in 6 bdn.). 8.

である。

岩崎克己は、本多利明が寛政12（1800）年7月13日の書簡で言及した「ゼオガラヒ」が、四冊本から六冊本が不明だとしている（岩崎克己 [1940] 28-30頁）。その言及とは、「ゼオガラヒといふ書之内にフランス國の政事あり窮民の救金の事あり日本金の勘定を以すれ八十五万兩餘に當るなり…」（本庄榮二郎 [1935] 380頁）というものである。

同様な記述は、「交易論」にもあるが、数字などが微妙に違う、「^{こんきゅうのたみ}困^{はいじん ひんじん}窮民、^{はいじん ひんじん}廢人、^{ひんじん}貧人、^{よういくかん}病人を救ふ。フランカレイキは殊に厚く、^{たておき}養育館を国内六ヶ所に^{たまわ}建置、^{たまわ}其雜費を^{たまわ}給る事毎年同じ。日本文字金の算用にして試るに、百四十二万兩なり（ゼオガラヒといふ書に見）」（『大系』「交易論」169頁）

(9) レイツ（J. F. Reitz）他『新旧ロシア帝国誌』

Oude en Nieuwe staat van't Russische of Moskovische Keizerryk Behelzende eene uitvoerige Historie van Rusland en deszelfs Groot-vorsten. Utrecht, 1744.

文化2（1805）年三月朔日の書簡で「先年ロシア本記と申書二冊大本にて新渡之所松木侯之御買上ヶ相成其後前野良澤へ被下候處良澤死後拂物二出候所俗吏之手二入行衛を失ひ居候へ共此節其吏より私知人へ讀譯候様二との儀二付預り申候當時專に翻譯仕候間出來次第可入御覽候」（本庄榮二郎 [1935] 393-394頁）とあるが、ここで「ロシア本記」と記されている書籍が、『新旧ロシア帝国誌』であれば、1805年段階で入手したことになる。しかし、工藤平助の「赤蝦夷風説考」にこの本が引かれているので、阿部真琴は少なくとも翻訳でこの本を知っていたとしている（阿部真琴 [1955b] 82頁）。また鮎沢信太郎は、この書簡に出てくる「私知人」とは、山村才助ではないかと推測している（鮎沢信太郎 [1989] 219頁）。

才助はこの本を訳して「魯西亜国誌」（1805-1806頃）と題しているが、その訳文にはところどころ「利明曰」の注がある（阿部真琴 [1955b] 82頁）。そこから利明はこの訳業に関係していたとみられている。

なお書簡で、オランダの地理書が手に入ったといっているところもあるが、書名は記され

5) 詳しくは、岩崎克己氏の論文を参照（岩崎克己 [1940]）。

ていない(本庄榮二郎編[1935]『本多利明集』388頁)。

4. コーラントトルコ

新村出は、西洋の実情の情報源として、オランダ風説書やオランダ人から直接聞いたもの、あるいは日本人の書いたものの焼き直し以外に、明末清初のイエズス会の宣教師が漢文で書いた地理書が8代将軍吉宗の解禁以来輸入され参考にされたこと、寛政以前は大部分は150年も前の地理書によっていたこと、しかし寛政文化においては、明末清初の旧式学術をまず天文学において、次いで地理学において排斥したことを述べ、そして天明時代には蘭文の地理書が世界知識の源泉となったとして、重要なものとして、次の3点をあげている(新村出[1925]60頁)。

- (1) Johann Hübner, Geographie
- (2) Ditto, Kouranten-tolk
- (3) A. Fr. Prévost, Historische Beschrijving der Reizen van geheele Wareld

(1)は、上の(8)にあげたゼオガラヒーで、当時の蘭学者の基本書の一つである。(2)のコーラントトルコは、「時事通覧」とでも翻訳すべき世界地名辞書で、これも後まで蘭学者の宝典となったものであると述べている(新村出[1925]61頁)。

ゼオガラヒーは利明も言及しているが、あとの二つは特に述べていないようである。しかし、これらは蘭学者の宝典で、西洋事情を知ろうとする者の共有財産であったから、友人の山村才助を通じて、あるいは何か他の経路から、直接あるいは間接的に知っていたとしても不思議ではない。そこで、とりあえず本稿では、コーラントトルコについて見てみよう⁶⁾。コーラントトルコのネーデルランドとロシアの項目は以下のものである。

「ネーデルランドは、東はドイツに接し、南はフランスのロレーヌ地方に接し、西と北はドイツ海に接している⁷⁾。長さ約60ドイツマイル、幅は約40ドイツマイルである。これは12州に分割され、全部で212の町と、6591の村がある。」その後オーストリアとの政治史の関係が書かれ、「ネーデルランド連合は、そのほかの7州からなり、すなわちホラント、ゼーラント、ユトレヒト、低ヘルデルラント、オーフェルアイセル、フローニンゲン、フリースラントである」と記す。

このように、オランダの歴史の簡単な紹介が載っている。事実が述べられているから、当然のことながら、利明のオランダ建国史とは合わない。利明のオランダ建国史は、その四大急務の大きな根拠となっているのだが、利明にそのオランダ建国史を作らせるような、つまり利明が誤解して、オランダ建国史を構成する要素になり得るものもないようである。

次にロシアについて見てみよう。

まず、国土の概観がなされ、それから歴史が語られる。ロシアは都市が少なく、多くは森

6) <https://books.google.co.jp/books?id=NfBWAAAACAAJ&pg=PA1&dq=Kouranten-tolk&hl=ja&sa=X&ved=0CBwQ6AEwAGoVChMI9Pj3jbeqyAIVh5eUCh2zXQCa#v=onepage&q=Kouranten-tolk&f=false> (2015年10月5日閲覧)。

7) 今はドイツ海という言い方は普通しないと思うが、ドイツ湾ならある。

と荒地だが、決して不毛ということはないこと。ピョートル大帝が文明国の外国人を招聘して、富国強兵と習俗の洗練に努めたこと。有用な學術の導入、交易に役立つ航行速度の向上を図っただけでなく、300,000人の兵士と巨大な船団に及ぶ軍の増強、交易の発展を図ったこと。1700年以来ロシアは、スウェーデンと戦争をし、1709年に勝利したこと、トルコとの戦争（1710年）、フィンランド占領（1714年）等々の国際関係。そして現在の皇帝はエリザベータであり、その後継者がピョートル・フョードロビッチ大公という名も持つカール・ペーター・ウルリヒであると述べられる。

このように利明がロシアモデルを組み立てる上で直接採用できる要素はほとんどないと思われるが、ピョートル1世の事績には通じるものがある。

なお新村出は、上述のように、コーラントトルコを「世界地名辞書」としているが、実際は、ここに見たように、国土の概観のあとは、政治史が書かれていて、おそらくはヒュブナーの主著の「ゼオガラヒー」で述べられていることをアルファベット順に項目を立てて簡単に述べたもの、つまりゼオガラヒーを辞書的に編纂した簡約版というような代物だと思われる。

参考文献

一次資料

桂川甫周 [1965] 『北槎聞略』 吉川弘文館。

工藤平助 [1978] 「赤蝦夷風説考」 寺澤一・和田敏明・黒田秀俊編 『赤蝦夷風説考・三国通覧図説・赤夷動静』（北方未公開古文書集成）第三巻、叢文社。

林子平 [1978a] 「三國通覧圖説」 寺澤一・和田敏明・黒田秀俊編 『赤蝦夷風説考・三国通覧図説・赤夷動静』（北方未公開古文書集成）第三巻、叢文社。

林子平 [1978b] 山岸徳平・佐野正巳編 『新編林子平全集1』 第一書房。

塚谷晃弘・蔵並省自 [1977] 『本多利明 海保青陵』 日本思想大系44、岩波書店。

羽太正養 [1978] 「休明光記」 寺澤一・和田敏明・黒田秀俊編 『休明光記』（北方未公開古文書集成）第四巻、叢文社。

本庄榮治郎編 [1935] 『本多利明集』 誠文堂新光社。

前野良沢 [2010] 「魯西垂本紀」 大分県立先哲史料館編 『前野良沢 資料集』（大分県先哲叢書）第三巻、大分県教育委員会。

二次資料

秋月俊幸 [2014] 『千島列島をめぐる日本とロシア』 北海道大学出版会。

阿部真琴 [1955a] 「本多利明の伝記的研究(一) 附『本多利明著作目録』」 『ヒストリア』 第11号、66-78頁。

阿部真琴 [1955b] 「本多利明の伝記的研究(二) 付『本多利明著作目録』 第二部」 『ヒストリア』 第12号、80-91頁。

阿部真琴 [1955c] 「本多利明の伝記的研究(三) 付『本多利明著作目録』 第三・四部」 『ヒストリア』 第13号、99-112頁。

阿部真琴 [1956a] 「本多利明の伝記的研究(四)」 『ヒストリア』 第15号、54-60頁。

- 阿部真琴 [1956b] 「本田利明の伝記的研究(五)」『ヒストリア』第16号、48-55頁。
- 阿部真琴 [1957] 「本田利明の伝記的研究(六)」『ヒストリア』第17号、61-66頁。
- 鮎沢信太郎 [1980] 「本多利明の外国地理学」鮎沢信太郎『地理学史の研究』原書房、282-301頁。
- 鮎沢信太郎 [1989] 『新装版 山村才助』吉川弘文館。
- 石山洋 [1957] 「大地理師ヒュブネルをめぐって 近代地理学の曙と蘭学(その2)」『上野図書館紀要』(国立国会図書館支部上野図書館編)、33-56頁。
- 板澤武雄 [1932] 「厚生新編譯述考」『史學雜誌』43巻8号、949-994頁。
- 岩崎克己 [1940] 「ゼオガラヒーの渡来とその影響」『書物展望』10 (12) (114)、22-30頁。
- 岩崎克己 [1941a] 「ベシケレイヒング・ハン・ルースランドの流傳と翻譯 (一)」『書物展望』11 (11) (125)、2-10頁。(論文の題名には「ベシケレイヒング・ハン・ルースランド…」となっているが、本文中は「…ルースランド」となっているので、題名の方が誤植だと思われる。ここでは訂正したものをあげておいた。次の続編の論文も同様である。)
- 岩崎克己 [1941b] 「ベシケレイヒング・ハン・ルースランドの流傳と翻譯 (二)」『書物展望』11 (12) (126)、6-11頁。
- 岩崎克己 [1941c] 「山村才助の著譯とその西洋知識の源泉に就いて」『歴史地理』第77巻第4号、237-264頁。
- 岩崎克己 [1996a] 『前野蘭化1』平凡社。
- 岩崎克己 [1996b] 『前野蘭化2』平凡社。
- 岩崎克己 [1997] 『前野蘭化3』平凡社。
- 大原左金吾 [1972] 「地北寓談」大友喜作編『北門叢書』第三冊、国書刊行会。
- 小沢栄一 [1966] 『近代日本史学史の研究 幕末編』吉川弘文館。
- 開国百年記念文化事業会 [1978] 『鎖国時代 日本人の海外知識 世界地理・西洋史に関する文献解題』原書房。
- 片桐一男 [1971] 「杉田玄白と海外情報」『日本歴史』272号、69-76頁。
- 片桐一男 [1978] 「オランダ商館長フェイトと林子平」(林子平『新編林子平全集』第一書房、月報1)。
- 片桐一男 [2000] 『江戸の蘭方医学事始 ^{オランダ}阿蘭陀通詞・吉雄幸左衛門 幸牛』丸善ライブラリー。
- キーン、ドナルド [1982] 『日本人の西洋発見』芳賀徹訳、中央公論社。
- 佐藤昌介 [1980] 『洋学史の研究』中央公論社。
- 島谷良吉 [1977] 『最上徳内』吉川弘文館。
- 新村出 [1925] 『續南蠻廣記』岩波書店(『新村出全集』第六巻、筑摩書房、1973年、所収)。
- 鳥井裕美子 [2015] 『前野良沢 生涯一日のごとく』思文閣出版。
- 森岡邦泰 [2015] 「本多利明の著作における海外情報」『大阪商業大学論集』第11巻第1号(通巻177号)35-48頁。